

あうん

教師と生徒・保護者があうんの呼吸
で教育ができることを願って……

第 22 号
令和 4 年 3 月 23 日

時に独善は、悪意よりはるかにたちが悪い。

須賀しのぶ『また、桜の国で』

1938年10月1日、外務書記生の棚倉慎はワルシャワの在ポーランド日本大使館に着任した。ロシア人の父を持つ彼には、シベリアで保護され来日したポーランド人孤児の一人、カミルとの思い出があった。先の大戦から僅か二十年、世界が平和を渴望する中、ヒトラー率いるナチス・ドイツは周辺国への野心を露わにし始め、緊張が高まっていた。慎は祖国に帰った孤児たちが作った極東青年会と協力し、戦争回避に向け奔走、やがてアメリカ人記者レイと知り合う。だが、遂にドイツがポーランドに侵攻、戦争が勃発すると、慎は一人の人間として、生きる決意を固めてゆくが……。

(祥伝社HPから転載)

みなさんは“高校生直木賞”というものを知っているでしょうか？

それは、全国の高校生たちが集まって議論を戦わせ、直近一年間の直木賞の候補作から「今年の一作」を選ぶ試みで、2014年に始まって昨年で第8回目を迎えました。もともとフランスには読書教育の一環として30年以上の伝統がある「高校生ゴンクール賞」というものがあり、その日本版を目指して開催されたものだそうです。(高校生直木賞HPより)

今回紹介するのはその第4回受賞作『また、桜の国で』です。

文春オンラインの記事「歯ごたえのある小説『また、桜の国で』が“高校生直木賞”に決定するまで」(<https://bunshun.jp/articles/-/2568>)に選考過程が詳しく紹介されています。なにせ500ページを超える大作。しっかり読み切るにはかなりの読書体力が必要と思われます。この記事にも『桜の国』は厚いし、戦争だし、読書が苦手な人は読めないのでは？全ての高校生に薦めることはできないよ」という意見もあったと紹介されています。しかしながら、「ユダヤ人差別など、この本に描かれている宗教、民族の問題は、今、世界各地で起こっていることと深くつながっている。タイムリーな作品」と評価する声があり、さらに「議論していくうちに『桜の国』こそ後の世代に伝えていくべき本ではないかと思うようになった」などの意見もあり、最終的にこの作品が選ばれたのです。

主人公棚倉慎は父親がロシア人であるため、自身のアイデンティティに悩むのですが、ポーランドの領事館に書記官として赴任し、以前日本にいたことのあるポーランド人戦争孤児との出会いと交流を通して、日本人として生きていく決意をします。この小説の主たる舞台は外交の場。当時の日本の立ち位置によって振り回される外交の最前線。そして大国に翻弄されるポーランドとその国民。歴史の重みにつぶされそうになりながらも、主人公の視点にそって歴史をたどっていくことになりますが、随所に人としての生き方・在り方を考えさせる言葉があふれています。幾つか紹介します。

「時に独善は、悪意よりはるかにたちが悪い。」

「傷は、人を弱くはするけれど、同時に突き動かす最高の原動力ともなりうる。」

「国を愛する心は、上から植えつけられるものでは断じてない。まして、他国や他の民族への憎悪を糧に培われるものであってはならない。」

「人は他人の思想を借りて自分の思想とするかぎり、自分にも、自分の行いにも最後まで責任を持つことができない。自ら考え、自ら信じることに従って動く時のみ、全責任を負うことができるのだ。」

世界情勢が混沌としている今だからこそ、手にしてほしい一冊です。



(ポーランド・グダンスク)